

ジャジャムのとき



松果：文

(表紙写真：(c)Tomo. Yun <http://www.yunphoto.net>)

前編

ハナミズキの花は、いつの間にか散ってしまった。

通学路の両脇を彩る白やピンクのツツジの花が、どうだどうだと咲き競っている。

「今日持ってきてくれるって言ったよね」

その日カナナはぶつぶつ独り言を言いながら真っ直ぐ家に向かった。いつもなら乾物屋の柴犬をしばらく構ってから帰るのだが、今日はそれどころじゃない。

家に着くなり通学鞆を玄関に放り込み、そのまま勝手口に回る。

「やほー、来てる来てる」

戸を開けた途端に、ほわりと甘い香がする。流し台の上には粒の揃っていない苺が、二つの箱に分けられてドンと置かれていた。

毎年五月中旬になると、こういう規格外の苺が家に届く。どうせシーズンの終わりになるとお店に卸しても安いから、と苺農家のハタさんが持ってきてくれるのだ。

「あんたハタさんに会ったらちゃんとお礼言いなさいよ。規格外たって作る手間は同じはずなんやから」

洗濯物を取り込みながら声をかける母にハイハイと適当に返事をしておいて、苺を早速一粒、口に放り込む。

「ん、おいしっ」

「ちゃんと洗（あろ）うたん？」

「洗った洗った。あ、そうだお母ちゃん、ねえねえねえ」

取り込んだ洗濯物を抱えたままの母の肩に、カナナは甘えるようにひっついて歩いた。

「ちょっとやめなさい。なに、おねだり？」

「ケータイよケータイ。いつ買ってくれるん？」

「あほらしい、部活や塾で遅うなるんならともかく、『帰宅部』にケータイなんか要りますかい」

「えー、そんなあ。友達は……」

「みんな持ってる、とか言うつもりやろ。その手は古いで、お嬢っちゃん。うちはまだ買わん。買わんちゅうたら買わん。ハイハイ手伝わんならどいて」

知らん顔で家の奥に引っ込む母に思い切りイーッとして、カナナは二階に駆け上がった。

着替えを済ませて台所を覗くと、苺の甘い香りに誘われてお腹がくくうと鳴る。腹立ち紛れに何粒かをつかみ、ヘタをむしっては口に放り込みながら、カナナは急に顔を明るくした。

「あ、そうだ。こんなことしてる場合じゃなかった」

早速流し台の扉を開けて、うきうきとザルやら片手鍋やらを引っ張り出す。

「まーたジャム作るつもり？」

いつの間にか母が様子を見に来ていた。

「そうよ、せっかくこんなにあるんやもん」

「ほー。ならお砂糖入れにおっきく『さ・と・う』って書いとかないかな」

ニヤニヤ笑いながら、母は廊下に向かいかけてまたヒョイと顔を突き出した。

「お嬢っちゃん、手伝い要りませんかね？」

「いらんわ！」

母に言われるまでもない。カンナだってもう中学生なんだから、一人で大丈夫。と思う。

「何よう。去年のだってお母ちゃんが悪いんやん」

白いホーローの片手鍋を見ていると、去年のジャム作りを思い出す。

煮詰めても、煮詰めても、一向にジャムらしくならない苺の粒。なんだか匂いまでおかしかった。

初めてのジャム作りで、まさか砂糖と塩を間違えるなんてベタな失敗を自分がすることになるとは思わなかった。それだって、前日に母が砂糖入れと塩入れを安物の密閉容器に変えたのがいけないのだ。

「じーぶんのしーっぱいを人のせいになっ」

鍋をじゃぶじゃぶと洗って、念入りに水分を拭き取りながら、カンナはぶつくさ言った。

今年は新しい砂糖を一袋、ジャム用に確保したから間違えようがない。母が特売日に買ったまま戸棚の中で忘れ去られようとしていたやつだから、文句を言われる筋合いもない。（もちろん賞味期限は確かめた！）

苺も洗って、これは一つ一つペティナイフでヘタを取り、ザルに広げる。木ベラに、秤に、計量カップを用意。手順は全て、頭の中に入っている。カンペキだ。

「ふふん、見てなっさい」

カンナは自信満々で明日の朝食を思い浮かべた。ルビーのような手作りジャムをドドンと置いてみせて、母に今日の言葉を撤回させてやるのだ。

「それ、晩ご飯のあとじゃいかんのん？」

「んー」

真剣な顔で、カンナは小鍋に向かう。ジャム作りはここが肝心なのだ。浮いてきたアクをせつせと取らないと、出来上がりがキレイにならない。

「放っとけ放っとけ。大喰らいがおらんほうが、おかずの当たりが多いわ。ははー」

食卓では父がビール、いや発泡酒を片手に夕食をパクついている。

「お父ちゃん、それじゃ駄目にならんで。カンナ、いいかげんにしなさいよ。ご飯は家族揃って食べるもんでしょうが。そんなもん食事の後にしたらええのに……」

「だって、途中で火止めたら変になるやん！」

カンナはわざと大きな音を立てて鍋の縁をお玉で叩いた。

分かっている。作り始めるタイミングが悪かった。一度苺を煮始めたら、砂糖が焦げないように鍋をずっと見ていなくちゃいけないんだから、母の言うように夕食後に始めるべきだった。けど、早く作りたかったんだからしょうがない。こういうことは気分が盛り上がった時に、その場のノリでガッツとやらなくちゃ。自分に言い訳しながらアク取りに集中する。

小鍋の中では苺が程よく煮崩れて、水分が少なくなってきた。そろそろレモン汁を投入。途端にジャムらしい粘りと鮮やかなルビー色のツヤが出てくる。木ベラで少し、皿に取って味見してみる。

「あちっ。でもおいしーっ！」

この瞬間がカンナは好きだ。本当は出来立てよりも少し冷ましてからのほうが甘いんだけど。頬っぺたを押さえて口の中の甘酸っぱさに思わずニンマリしてしまう。カンナがあまり嬉しそうなものだから、小言を言っていた母もやれやれ、と頭を振って笑っている。

「あ、そうだ。ビン出しとくの忘れた」

カンナは慌てて流し台の引き出しを開けた。市販の苺ジャムやマーマレードの空き瓶を何個か、きれいに洗って取っておいたはずだ。スーパーや百円ショップでだって保存ビンは打っているけど、やっぱり赤や金色の蓋のやつじゃないと、可愛くない。だから……

「あれえ、お母ちゃん、ここに入れといたジャムの瓶知らん？」

「瓶？ そんなもん……あーっ、カンナ！ 鍋、ナベ！」

慌ててコンロの上を見た時には、水気の無くなったジャムがチリチリ音を立てていた。

「あんたね、そういうことは火止めてからにきなさいて！」

「こ、焦げてないもん。それより瓶は？」

「えー、瓶？ さあ、ええっとなあ……」

母は気まずそうに流し台の開き戸をあちこち開けて覗いている。

「まさか、捨てたんじゃないやろね？」

「さあー捨てたかなあ。この前引き出し整理した時になんか空瓶がガラガラしとると思うて……」

」

「なんで！」

カンナの大声に、テレビを観ていた父も驚いて振り向いた。

「なんで勝手に捨てるん？ あたし、このために取っといたのに」

「そんなもん、要るなら要ると言っとかな。空き瓶何個も転がしとったら誰でもゴミと思うわ」

「転がしてないやん！ 何よう、去年もお砂糖入れ勝手に変えたりして！ 今年こそ、思うとったのに。お母ちゃん、なんであたしのしたいことジャマばかりするん？」

怒りに任せてまくしたてるうちに、カンナの声が裏返った。涙まで出て来る。

「ばかりってあんた。だいたい瓶なんか煮沸消毒して最初に用意しとくもんやろうに。そしたら早う気が付いて他の瓶用意したのに」

「そんなん関係ない、お母ちゃんが悪い！」

「ほー母娘戦争ぼっ発か。やれ、やーれい」

食卓から父が呑気な声を掛けるのを聞いて、カンナの頭の中でぷちっと音がした。

「もう知らん！ こんなジャム、食べられやせんわ！」

ジャムが入ったままの熱い鍋を流しに放り投げ、その上で水道の蛇口をひねった。ジャーッと勢い良く流れる水と共に、ジャムが無残な姿で飛び散る。

「かんなーっ！」

母の怒声。叩かれる、と思ってカンナは目をつぶった。

——食べ物ヲ粗末ニシタライカン。

小さい頃からさんざん言われたことだ。母はビンタのひとつもくわせるに違いない。

けれど、その「一撃」はなかなか来ない。恐る恐る片方ずつ目を開いてみると、母は背を向けていた。黙って、流しの中をただじっと見ている。

「おいカンナさんよ。そらお前……」

「うっさいわ！ お父ちゃんはテレビ見とったらええんよ！」

カンナは台所を飛び出すと二階に駆け上がり、部屋に飛び込んでベッドに突っ伏した。

こんなはずじゃなかった。

今日のために図書館で本を三冊借りて『予習』した。

ハタさんとこのおばちゃんにもジャムの作り方をしっかり聞いた。上手く出来たら親友のチハルちゃんにもあげるつもりで、パソコンの授業の時に可愛いラベルシールも作っておいた。

頭の中では何もかもカンペキ……のはずだったのだが。

肝心の保存瓶のことを忘れてたとは、我ながら間抜けすぎる。いや、忘れてたわけじゃない。思い出すのがちょっと遅かっただけだ。

「なんでこうなるんよう……」

枕元のネコの縫いぐるみをつかんで頭突きする。放り投げる。それでも胸のムカムカは治まりそうになかった。

腹へった。

これはもう、「お腹が空いた」なんてお行儀の良い状態じゃない。

頭、くさいかも。お風呂、入りたい。

けど、そうするには一階に下りて母と顔を合わせなければいけない。

カンナは猫みたいな格好でのそのそ窓に向かい、暗い庭を見た。

微かに明るい部分があるのは、お風呂場の窓が庭に向いているせいだ。父の下手っぴな鼻歌が聞こえる。中学生の娘に「うっさいわ」となじられて、叱りにも来ないとは呑気な親だ。

ふいに庭の一角が明りが差した。母が勝手口を開けたのだ。そのままポリバケツにゴミを捨てる背中が、なんだか知らないおばさんのように老け込んで見える。あのゴミの中には、カンナが台無しにしてしまった苺ジャムの残骸も入っているのだと思うと胸がちくんと痛んだ。

風呂場の鼻歌が止み、勝手口の明かりが消え、もう一度湯の流れる音を聞いてからカンナはこっそり一階へと降りた。思ったとおり、今度は母が風呂に入っているらしい。

つっかけサンダルを履いて暗い庭に出ると、カンナは青いゴミバケツに向かってパシッと手を合わせた。

「ごめんなさいごめんなさいハタさんごめんなさい苺さんごめんなさい！ いっぱい無駄にしちゃってごめんなさいっ」

小声でひたすら謝っていると、また涙が出てきた。ジャムの瓶がどうか、本当はそんなみみっちいこと、どうでも良かったのだ。ただ、母に何か言われるたびに無性に腹が立って。そんなことで苺にまで八つ当たりしてしまう自分が情けない。

「ほー、謝ることも知っとるんか。ただのヒステリー娘やなかったな」

いきなり声を掛けられてぎょっと顔を上げると、父が頭をもさもさとタオルで拭きながら立っていた。

「お母ちゃん風呂に入ってるから、ゴハン食べるんなら今のうちやぞ——と言いたいが！」

父の顔がきゅっと厳しくなった。

「人様が好意でくれたもんを粗末にするような娘は晩メシ抜きや。おまけにお母ちゃんまで泣かして……頭下げるんならゴミバケツじゃのうてお母ちゃんの前でせい！」

「な、泣かすって。え、お母ちゃん泣いとったん？」

「おう。あの鍋、中にヒビが入ってなあ。見てみ」

父が指差す先を見ると、さっきの白い鍋がゴミバケツの隣にひっそりと置かれていた。内側を覗くとホーロー加工の表面に細かいヒビが入って、ところどころコーティングが剥がれている。忘れていた。こういう鍋は金属鍋と違って、空焚きしたり急に冷やしたりは厳禁だと母に聞いて

いたのに。母が背を向けて見ていたのは、これだったのだ。

「まあ安モンやけどな。これ、新婚の時お母ちゃんに初めて買うたった鍋や。カンナが生まれてからはこれで離乳食作って、幼稚園の弁当も作って、結構大事に使った。いや、俺も言われるまでは忘れとったけど」

「……ごめんなさい」

「ほやから一、謝るんならお母ちゃんに謝れや」

父の大きい手がカンナの頭をワシャワシャとする。

謝れるだろうか。目尻の涙を拭きながら、カンナは思った。父には何度でも素直に謝れる気がする。けど、母にはなんだか頭を下げたくない。自分が悪いのは重々分かっているけど、謝ったりしたら『負け』な気がする。何に『負け』なのかは知らないけど。

蚊に喰われるぞ、と声を掛けて父は先に家に入った。とっくに喰われてるよ、とつぶやいて、カンナは痒い腕を掻きながら月を見上げた。

「なーんか悪い子になったな、あたし……」

今夜あたり満月のはずなのに、見上げる夜空はぼやぼやとした白い光しか見せてくれない。

明日は、雨になるかもしれない。

空腹というやつは、どんな目覚まし時計よりも早起きに効くようだ。

結局昨夜は麦茶を飲んだだけで済ませた。その気になれば夜中に冷蔵庫を漁ることだってできたし、父に泣きつけば夜食にカップ麺の差し入れくらいは期待できただろうが、カンナは敢えてそうしなかった。だって、これは意地の問題なのだ。

しおらしく母に謝って、夕食にありつくか。

意地を通して朝まで空腹をガマンするか。

正直言って九十パーセント以上の気持ちは「夕食」に傾いていたが、母が風呂から上がる音を聞いた途端、反射的に階段を駆け上って部屋に立て籠もってしまった。

「あっほやん、あたし。肉じゃが食べたかったー……」

ぐうぐう鳴って抗議するお腹をネコの縫いぐるみで押しえつけながら、そのままカンナはふて寝したのだった。

お陰でいつもより早く目が覚めたのには感謝したほうがいいかもしれない。

カンナが一階に下りた時、観光市場でパート勤めをしている母は既に家を出た後だった。テーブルにきちんと並んでいる茶碗と汁椀。味噌汁の鍋の隣にあるのは鮮やかな黄色い卵焼きと、昨夜食べ損ねた肉じゃがの残り。いつも『トーストと目玉焼き』で済ませていたカンナは大喜びでご飯をよそった。

父はとっくに食事を終えたはずだ。庭でタバコをふかしながら隣家のおじいさんとしゃべっている。

母ほどではないにしろ、缶詰工場に勤める父もまた出勤時間が早い。いつもギリギリの時間まで寝ているカンナを起こし、朝食をちゃんと食べるように言い聞かせてから慌てて職場に向かうのが日課だ。

ご飯は家族揃って食べるもの、なんていうのは母の理想論なんだろうなあ可哀想に、なんて思いつつながら味の良くしみたじゃがいもを頬張っていると、父の声が聞こえてきた。

「いや、あれでうちの娘もきかんヤツでね。反抗期、ちゅうやつよ。もう母娘で戦争始めたら怖い怖い。ああいう時は父親なんか居《お》り場が無いわ、ははは」

なにが『ははは』だ。カンナは箸を卵焼きに突き立てた。

誰が反抗期だって？ 昨夜までは自分の味方のように思っていた父が急に憎たらしく思えてきた。

「ね、チハルちゃん。親とかに反抗期って言われん？ あれ、すっごいムカつくことない？」

「んー、どうかなあ」

のんびりした声で返しながら、小柄なチハルちゃんは通学鞆を背負い直した。中学指定の通学鞆は、一年生のカンナ達にとって制服と同様、まだしっくり身体に馴染まない。これなら小学校のランドセルのほうがまだ背負いやすかったな、と思いながらカンナも鞆を揺すり、昨夜からの一部始終を話した。

「ひやははは。それでキレてお鍋ひとつダメにしたん？ カンナちゃんらしいわあ」

「反省はしとるよ、一応。けど、お父ちゃんにはがっかりした。自分だってお母ちゃんの言うこ

と聞かずにタバコ吸いよるくせに。ああいうのは『反抗』やないん？」

足元の石ころを思い切り蹴飛ばし、カンナは制服の襟をパタパタさせた。朝だというのに、通学路の坂道は蒸し暑い。頭の上では梅雨を思わせるような重い色をした雲が広がっている。

「だいたいね、『反抗期』で大人が自分の都合で作った言葉やろ。小さい頃はな一んも分からんし、とりあえずハイハイと言う事聞くしかないやん。それが大きくなっていろんな事分かってきたら、大人のおかしいところにツッコミ入れたくなるのは当たり前と違うん？ それをよ、自分のことは反省せんと子どものこと『反抗期』で一括りにしてごまかそうとしよる。ずるい！」

「カンナちゃん、面白いこと考えるね。ハンコーキかあ。なんか、市場のダンボールに印刷されとる記号みたいやね。『秀』とか『糖度〇〇』とかと変わらん感じ」

「うっわ、そしたらあたしら、ピーマンや八朔《はっさく》と同じ扱いか。腹立つー」

二人がおしゃべりしながら校門に駆け込んだ直後、ついに雨が降り始めた。

雨は時間を追うごとに強くなり、午後は短縮授業になった。

台風が近づいている影響で大雨洪水警報が出されたからだ。

当然部活も全て中止となり、久しぶりにチハルちゃんと一緒に帰ろうとしていると、校門前にパン屋の車が止まった。

「あ、チハルちゃんのお母さん……」

「ああカンナちゃんも一緒やね、良かった。早うお乗り、あなたのお母ちゃん、仕事場でコケて病院に運ばれたんよ！」

雨は叩きつけるように降り続けている。ワイパーがせわしなく右左に動く音が耳につく。

「狭くてごめんね、カンナちゃん大丈夫？」

「うん……」

パンを積む四角いケースの隙間で揺られながら、カンナの頭の中ではドラマでよく見るシーンがぐるぐるしていた。

『お母さんが倒れました、すぐ帰りなさい』という言葉に青ざめるヒロイン。大抵はドラマの中盤、一時間ドラマなら始まって二十五分頃。しかし『コケた』と聞いて青ざめるシーンは見たことがない。『コケた』って……

「いや一目から火いが飛んだわ、ほんと」

病院から帰るなり茶の間の座椅子にどてっと身を預け、顔を氷のうで冷やしながら、母は人ごどのように笑った。

「商品搬入口のスロープ、雨で滑り易うなとったんやね。んで、台車を押したたまま顔からどーん！ で、気が付いたら病院よ。ほんでも商品は無事だったらしいわあ。前歯は欠けてしもうたけど」

「笑いごとやないやろお母ちゃん！ もう、チハルちゃんのお母さんにまで世話かけて恥ずかしい！」

結局、たいした怪我ではなかったようだ。

車に乗せてもらって病院に向かう途中、母が死んだらどうしよう、なんてずっと心配していたのがアホらしくなってきた。

こんなノーテンキな母親を心配なんかして損した、とカンナは頭をかきむしった。

「ま、腕を折ったとかじゃなくて良かったな。早めに歯医者にも行っとけよ。前歯欠けたとか余

計にブサ……いや、目立つとこやし」

知らせを受けて急いで職場から駆けつけた父は、再び玄関で長靴を履こうとしている。

「なに、お父ちゃんまだ仕事？ 台風やのに」

「今頃の台風は上陸せんわ。それに工場は大勢の人が働いとるんぞ、お父ちゃんの部署は小さいけど、責任者が抜けるわけにはいかん。お母ちゃんを頼むぞ、カンナ」

そう言いおくと、父はカップを着こんで大雨の中を出かけて行った。

頼むぞと言われても。ただでさえ昨日のことで気まずいのに、と母を横目で見ると。

「ああそうだカンナ、お土産があるんよ。お母ちゃんの手さげ開けてみ」

言われるまま母の手さげ袋を開けてみると、新聞紙の包みが三個、ゴロツと出てきた。

「なにこれ……ビン？」

「今度お母ちゃんの担当する産直コーナーで使うジャム瓶や。可愛いだろう？ カンナにあげる」

新聞紙を開いてみると、白地に赤いギンガムチェックの布を被せた蓋が見えた。市販のジャム用よりいささか平たいが、確かに可愛い。カンナの胸がきゅっと痛んだ。

「あ、あのねお母ちゃん。あの鍋、お小遣い貯めて同じようなの買うから……」

「アホたん。あんなもうええわ。十二年も使って昨日で役目を終えたんよ、あの鍋は。それよりまた頑張ってジャム作りなさい、一生懸命『予習』したんやろ？」

氷のうを半分ずらして、母はこっちを見ている。目を合わせられなくて、カンナはわざとぶっきらぼうに答えた。

「まあ、ビンは貰っとくけど。折角やけん」

言わなくちゃ。『ごめんなさい』を今、言わなくちゃ。

カンナがさんざん迷った挙句やっと顔を向けると、母は軽いイビキをかいて眠っていた。

「あーもう、なんっちゅう親や。人の気も知らんとお！」

文句を言いながら、押入れから毛布を引っ張り出して母に掛けてやる。

ごめんね、とカンナが小声で言ったのも、母に聞こえたのかどうかはわからない。

* * *

父の言ったとおり、台風は上陸することもなく通り過ぎ、翌日は真夏のような天気になった。カンナは放課後ジャージに着替えると、真っ直ぐハタさんのビニールハウスに向かった。

案の定、ハタさん夫婦は台風の後片付けで忙しそうだった。

「あらあカンナちゃん。昨日はお母さん大変やったねえ」

おばさんがすぐに気付いて声を掛けてくる。ハタさんにまで知られてたのか、とカンナは肩をすぼめた。小さい町では些細なニュースまですぐ隣近所に知れ渡ってしまう。

「お母ちゃんなら大丈夫です。あのハタさん、この前の苺やけど……」

母と些細な理由でケンカしてしまった事、折角ハタさんがくれた苺を台無しにした事をカンナは正直に伝え、頭を下げた。

「ほんつとに、すみませんでした。で、あたしお詫びになんかお手伝いしたくて」

「あはは、そんなことでわざわざ来たんか」

おじさんは日焼けした顔をほころばせた。おばさんも手を休めないまま笑いかける。

「カンナちゃんは真面目やねえ。そういうとこ、お母さんにそっくりや」

「え、あたしがですか。どっちかというとお父ちゃん似やと思うとったけど」

「いや、似とるよ。まあええわ、折角来てくれたから手伝ってもらおか。そこの溝に溜まってる落ち葉、集めてくれる？」

「はいっ」

その日の夕方まで、カナはハタさん夫婦の作業を手伝った。思えば中学に入ってから、のりくりりと『帰宅部』を決め込んで身体を動かすことをあまりしてこなかったが、汗をかくのは思ったより気分が良かった。

「ナツちゃんとは——カナちゃんのお母ちゃんとは中学で一緒だったんよ。面白い子やし、妙に真面目で気が強いところもあるし、なかなか人気者やったよ」

畑から家へ帰ると、冷えた麦茶を勧めながら、おばさんはなぜか中学時代の思い出を懐かしそうに語り始めた。

「ちょっと困ったところもあったわ。いっぺんへソ曲げたらなっかなか自分からは謝らん。意地っ張りでねえ」

おばさんは笑っているが、カナは自分のことを言われているようで居心地が悪くなった。

「な、カナちゃん。あんたがお母ちゃんとぶつかるんは、似た者同志やからかな？」

「そ、そうかなあ」

「ふふ、ナツちゃんがうらやましいわ、ケンカしてくれる可愛いらし娘が居（お）って。うちの息子らは中学からは口も利いてくれやせんよ」

おい、と声を掛けておじさんが色鮮やかな甘夏柑を何個も持ってきた。

「これ御見舞い。もってお帰り」

「そ、そんな。苺もらったばかりやし」

「苺はカナちゃんにあげたんよなあ、お父さん。これはナツちゃんに。他のを出荷したあと木の枝に残して完熟させた実なんよ。お母さんに食べさせたげて」

おばさんの笑顔そのままのような甘夏柑の色が、カナの目に沁みた。

* * *

「お母ちゃん、もう起きなあ。八時よ」

「うう、日曜日くらいゆっくり寝かせてくれえ、オニ娘！」

布団を頭から被りながら母がモゴモゴ言う。

「なに言うとるん、ごはんは家族揃って食べるもの、ってお母ちゃんが言うたんでしょうが」

「はいはい……」

寝ぼけ眼《まなこ》で起きてきた母の顔は、まだ少し腫れている。

「あれっ、このハムエッグ。それにサラダも」

テーブルに並ぶ朝食を見て、母はいっぺんに目が覚めたような顔をした。

「俺が作ったんよ。やるもんやろう」

「へえ？」

テーブルの前で偉そうに腕組みをする父に、母は疑わしそうな目を向けた。

「へえ、じゃなからうが。カナが一生懸命何か作りよったし、俺も負けられやせん」

「ええと……母の日は先週終わったし。今日何かあったっけ」

「あーあ、自分の誕生日忘れとる。おいカナ、お母ちゃんやっぱり頭打っとるぞ」

「誕生日で……あーそうだった！」

冷蔵庫のカレンダーを見て、母は素っ頓狂な声をあげた。

「一週間しか違わんからいうて、毎年母の日と誕生日を一緒くたにするんもどうかとカンナと相談したのに、本人がこれやもんなあ」

父がニヤニヤしながらコーヒーを入れ始めた。

「まあおめでとさん。ハイこれ」

カンナがぶっきらぼうに何かテーブルに置いた。赤いギンガムチェックの布で飾られた可愛らしい瓶詰めだ。

「あれっオレンジ色……これ、マーマレード？」

「そうよ、ハタさんに貰った甘夏柑、無農薬や言うし。ちょっと作ってみた」

「ちょっとって、カンナさん。へえすごいやない。マーマレードって難しいんよ、ありがとう」

母は嬉しそうに瓶詰めを手にとって眺めた。

「なんー、俺の作ったメシは誉めもせんと」

「お父ちゃんもありがと。はい食べよ食べよ。ああでもなんか勿体無いなあ」

まるで宝物の蓋を開けるように、母はそうっと瓶を開け、鮮やかなオレンジ色の中身をひと匙すくった。

「あ、あれ、ちょっとゆるい……」

「やっぱり？」

マーマレードはスプーンからぽたぽた落ちる雫になって、トーストの上に見苦しく広がった。カンナが赤い顔になって心配そうに覗いている。

「おかしいなあ。ちゃんと分量どおりにお砂糖入れたし、本に書いてあった通りに作ったんやけど」

「ま、まあ本の通りにならんでもしょうがないって。ハタさんとこの甘夏は実も柔らかいしなあ」

慌ててカンナをなだめる母の隣から父が手を伸ばし、カレースプーンでござり瓶の中身をさらっていった。

「あーっ、お父ちゃん、そんないっぺんに……」

「ふむ、糖度三十パーセントちゅうところやな。煮詰め具合もまだまだ」

父はスプーンに山盛りのマーマレードを口に入れて済ました顔でいる。

「んな、分かったふうなこと言うて」

「馬鹿にすなよ、だてに長年缶詰は作ってないぞ。まあジャム作りも十年やってみ、ちょっとは上手になるやろ」

「ふんだ」

カンナは意地になって自分もスプーンを突っ込んだ。

「味は悪うないよカンナ。私はこれくらい酸っぱい方が好き」

「酸っぱい、というか苦みが強いな。けど面白い味になっとる。作った人間とおんなじ」

「あたしはジャムかあ？」

「いや、まだジャムにさえなっていないな。煮詰め足りん『ジャジャム』や、カンナは」

父は笑いながら顔をしかめてみせた。

イーッとカンナも返す。

「あ、そうだお母ちゃん。ケータイは当分まだええわ」

「なんで？ 諦めたん？」

「というか、その前歯治すほうが先やろ。そんな『歯っ欠けおばさん』じゃ、お父ちゃんもデートしてくれんよ」

ブーッとコーヒーを吹き出して、父がむせかえった。

母の笑い声が庭先にまでこぼれる。

窓の外で、鉢植えのトケイソウが揺れた。白い鍋を再利用した鉢カバーが丸っこい影を作っている。涼しい葉陰を縫って、アゲハ蝶がたどたどしい飛び方で空に向かった。

夏は、近いのかもしれない。